

# 高大連携講座「結びつく世界をどう学ぶか？Ⅲ

## —18～19 世紀のユーラシア— 報告

報告者：高橋一得・柴泰登・徳原拓哉

「高大連携講座」は、歴史分科会主催で毎年行っている高校生のための世界史講習会（AM）であるとともに、高校教員の研修会（PM）にもなっている。

「結びつく世界」をテーマに 2022 年度は 12～14 世紀のユーラシア、2023 年度は 16～17 世紀のユーラシア、2024 年度は 18～19 世紀のユーラシアに焦点を当ててきた。18～19 世紀を通観することは存外に難しく、変わったことだけでなく変わらなかったことは何かという視点が求められる 3 日間でもあった。登壇者の欠席などハプニングがあったものの、臨機応変な対応によって充実した学びの時間となった。



会場の栄光学園にて。初日挨拶の様子。

### 1 日目 8 月 6 日（火）「18～19 世紀のユーラシア東部」

報告：高橋一得（柏木学園高等学校）

#### はじめに

今回、私が担当したのは「18 世紀～19 世紀のユーラシア東部」であった。200 年という長い時間と「ユーラシア東部」といった広い空間をどのように捉え、1 時間の授業に収めるのかといったことが授業者に課せられた大きな課題であった。結果として、18 世紀～19 世紀の中国（清）、朝鮮、日本との国際関係を基盤としながら、清朝の歴史的展開を中心に授業をすすめることにした。本来、私が授業を行ったあと、大学側から杉山清彦先生が授業を行うはずだったのであるが、当日、杉山先生が体調不良のため午前の杉山先生の授業は古谷先生、桃木先生、前田先生の鼎談となった。幸いにも午後の研究協議には杉山先生も参加され、そこでは濃密な討論が行われた。

#### 高校教員による授業

授業者 高橋一得（柏木学園高等学校）

今回、授業を行うにあたって以下の 2 点を意識した。第一に、与えられた教室環境で授業を行うこと。第二に、受講する生徒に対して復習しやすい資料を提供したいといった点である。このような考え方を踏まえ、授業は講義形式をとることにした。とはいえ、講義形式をとりながらも、適宜、問いを投げかけ生徒も一緒に考えてもらうということは強く意識した。授業のねらいとしては、18 世紀～19 世紀におけるアジア世界に対する西欧の接近をどう理解するかといった点を理解してもらうことであった。「ウェスタン・インパクト」と呼ばれている現象を 18 世紀から 19 世紀、ないしは 17 世紀までを視野にいれ論じることを授業の主題とした。この点を具体的に授業で展開する場合、第一に、清の国制を理解させる必要性があり、第二に、この当時、主権国家を軸とした外交制度が確立しつつある西

洋国家の在り方と、清を中心としたアジア的な外交との差異を理解させることが重要である。こうした点を踏まえた上で、生徒にはアジアにおける「ウェスタン・インパクト」を立体的に捉えてもらいたいと考えた。

高校側の授業では、上記の点を意識したうえで、「1. 前提」、「2. 拡大と統一」、「3. 衝突と変容」、「4. 再編」と4つに区分けした。「1. 前提」で、清の成立過程とその特徴に触れ、「2. 拡大と統一」では、清の領土の拡大過程と、その支配の多元性を意識させた。

「3. 衝突と変容」では、この当時のイギリスの対外的な論理を意識させながら、それに対応する清の対応の方法や考え方を示した。「4. 再編」では、19世紀後半のアジア世界の再編過程を示した。こうした区分けの目的は、「ウェスタン・インパクト」を、「進歩した西洋/未開のアジア」といった二分法的視座から遠のかせるだけではなく、西洋の論理とアジアの論理との衝突、葛藤、そして、その折り合いの仕方を理解して欲しいと思ったからである。ただし、授業では、「4. 再編」にはほぼ触れることは出来なかった。この点に関しては、授業の方法論を含め、深く再考しなくてはならない点と痛感している。

他方、生徒たちは、こちらの質問に対して、的確な返答をしてくれ、改めてこの講座に参加する生徒の意欲の高さを実感することが出来た。その中で、アヘン戦争後の南京条約を含む清の対応に関して生徒からの質問があった。今回の授業では、南京条約を不平等条約とは見なさない解釈を示したことに対する疑問であった。この点は資料を示してはいたが、生徒が満足のいく返答を用意出来なかった。今後、より私自身が研鑽していくしかない点であった。

## 大学教員による授業/鼎談

授業者：古谷大輔（大阪大学） 前田弘毅（東京都立大学） 桃木至朗（日越大学）

杉山清彦先生が体調不良のため授業が行うことができず、急遽、杉山先生が準備されたレジュメ「結びつくユーラシアの構造転換——18～19世紀のユーラシア東部」にもとづいて古谷先生、前田先生、桃木先生による鼎談が展開された。博覧強記の3人の先生が議論するという事は、大変贅沢なことであるが、同時に、報告者泣かせな面もあった。杉山先生のレジュメに軸足を置きつつも、それに各々の先生方の視点や関心が上乘せられているため、その広い範囲からの話題提供や自由闊達な議論についていくのがやっとならざるを得なかった。それゆえ、この報告で先生方の鼎談の内容を正確にお伝えできる自信はない。しかし、このような贅沢な機会を記録として残しておくことは大変重要だと考え、報告者の問題関心に寄せて論じておきたいと思う。

この鼎談におけるテーマをあえて析出すれば以下の2つの点を挙げる事が出来よう。第一に、「帝国」をめぐる考え方である。これは杉山先生のレジュメで指摘されている「帝国から国民国家へ」という指摘と、また杉山先生が常に清を「大清帝国」という捉え方で論じているという点に基因するものである。ここでは各々の先生の研究領域から帝国の特質が語られることになった。また、18世紀と19世紀を架橋する概念としての「帝国」という考え方への重要性を示唆するものであった。第2に、近年の歴史学/歴史教育における分析軸や名称、そして概念の変化への言及である。例えば「ウェスタン・インパクト」をアジアに対する西洋の優位といった単線的な視点だけでは、十分に歴史的事象を捉えきれないのではないかと指摘などは、この点に当たるであろう。

あまりにも贅沢なこの鼎談は、生徒たちには少し難易度が高い気もしたが、専門学会等のシンポジウムでしか見られない光景を直接経験できるのも、この講座の良い面であると

実感した。

## 研究協議

午後の研究協議では、杉山先生が出席され自身のレジュメの説明から始まった。まずは清朝の政治体制の特質を説明された。そこでは先生の豊富な知識から繰り出される事例に聴衆は聞き入ることになった。特に清朝の歴史を理解する上で大事なものは、ユーラシア的な多文化的論理が内在している点である。この点が19世紀以降の清の国民国家化への困難に連なっていくと理解できる。他方、清朝の内部も構造転換が進み、とくに政権内での満洲人と漢人との交代の時期など、興味深いエピソードが語られた。こうした杉山先生の説明のあと、フロアを交えての活発な質疑応答が行われた。

いまひとつ、今回の研究協議を通して、古谷先生から「交差させる」といった方法論が幾度となく示唆された。これは時間と空間とが異なる要因を結び付け、新たな解釈を生み出せる方法論と理解出来る。概念や事象を絶対化することを回避し、歴史的な事象を重層的に捉えることが可能になる視点である。このような示唆が高校の授業実践でも活用できれば、より充実した授業を展開できるのではないだろうか。

## おわりに

今回、私の授業実践において当初から懸念されたのが、授業で行おうとする内容の分量と資料が多すぎるといった点であった。資料に関しては、打ち合わせの段階で、いろいろな先生の手を煩わせてしまった。前述したように、授業でもすべての資料に触れられず終わってしまったことは、強く反省すべき点である。他方、参加してくれる生徒に対しては、この授業に参加してくれたあと、復習に向き合う際に、少しでも有益になる資料を与えたいとも考えた。改めて、この講座のような歴史的に長い時間と広い空間を対象とする授業テーマを与えられたときに、どのような視点で、生徒と一緒に学んでいくかという点は、その授業方法を含めて真摯に向き合わなければならない課題だと考える。最後に、授業者として、この講座に参加した実感として、高校、大学の先生方の熱量の強さと、生徒たちの熱心さには、ただただ感服するばかりであった。

## 2日目 8月7日(水) 「18～19世紀のユーラシア中央部」

報告：柴泰登（中央大学附属横浜中学校・高等学校）

## はじめに

18～19世紀のユーラシア中央部と言えば、オスマン帝国など「衰退するイスラーム帝国」のイメージが先行し、高校の教科書では捨象されてしまう部分である。しかし、今回の授業では、高校教員・大学教員ともにそれらのイメージを払拭しつつ新たな歴史像を考えられる契機となる授業を生徒たちに提供することを心掛けた。

なお当初、高校教員による授業は県外の教員である川島啓一氏（同志社中学校・高等学校）にご登壇いただく予定であったが、家庭のご都合により出席が出来なくなったため、川島氏が提供して下さった資料を活かしつつ、代役として柴が高校教員側の授業を行うこととなった。

## 高校教員による授業

授業者：柴泰登（中央大学附属横浜中学校・高等学校）

急ぎよの登板だったため、私が世界史探究の授業で重要視している「文明」をキーワードとしながら、「文明の変容」について生徒が次第に思考を深めて表現できるような、私が学校で普段行っている授業を簡略化して実施した。

実際の授業は、まず最初に生徒の素朴概念を利用し、18～19世紀のユーラシア中央部の文明をどう捉えているのかについて、グラフ上で生徒に表現してもらった。その上で授業者（柴）の基準に基づいた時代区分・地域区分を紹介し、その場合における「18～19世紀」と「ユーラシア中央部」の位置づけを確認した。

続いて本時の問い（18～19世紀のユーラシア中央部は「衰退」の時代だったのか「発展」の時代だったのか）を生徒たちに問いかけたうえで、教科書に記載されている歴史的事項について、相対化された視点を生徒たちに提供することを意識しながら概説的な説明を行った。

最後に川島氏が準備していた資料（3種類）を借用して生徒間での意見交換の時間を設け、改めて18～19世紀のユーラシア中央部の文明情勢についてグラフで表現してもらった。その結果、素朴概念に基づいて書いた初期時点よりも複眼的な（グラフに分岐が起こるなど）グラフを生徒たちは描けるようになった。

## 大学教員による授業

授業者: 前田弘毅(東京都立大学)

副題を「創られた「伝統」・変容する秩序・生まれ変わる／引き裂かれるアイデンティティー」として、近年発行され話題を呼んでいるバーキー＝テズジャン著『第二のオスマン帝国』も話題に取り込んだ講義が展開された。講義の中では最新の知見に基づいた刺激的な提言が次々になされたが、その中でも特に注目すべきと思われる点をここで紹介する。

まず、「長い17～18世紀」と呼ばれる17世紀以降のオスマン帝国の変容についての指摘である。前田氏によれば、17世紀以降のオスマン帝国は決して「斜陽の帝国」などではなく、むしろ16世紀の世界状況の変化に対応して「内発的に」新体制を確立した時期だったとする。しかしヨーロッパ中心史観的な要素がまだ残る高校教科書では、それらの変革が、いわゆる「西洋の衝撃」を受けて受動的に開始されたといったイメージが先行してしまっている点を鋭く批判している。

また前田氏は、ロシアの台頭によるクリム＝ハン国併合のオスマン帝国側の打撃（「アジアの海」から「ヨーロッパの海」への変容）を指摘しつつ、18世紀のオスマン帝国がそれ以外のヨーロッパ方面で実は後退していなかった事実を重要視している。一方で、地政学的な変容をもたらしたロシアの台頭は、「ジャコバイト」なども含む非ロシア人（特にバルト・ドイツ人やアメリカ人など）によってもたらされたことを明らかにしている。

最後に前田氏は、18～19世紀における世界情勢の変化によってユーラシア中央部の人々に起こったアイデンティティクライシスやマイノリティの誕生、また近世的なユニバーサル帝国が迎えた危機について、ジョージア（グルジア）人やアルメニア人をおもな事例としながら指摘している。具体的には、彼らがアッパース1世の国制改革を支援したことなど、近世におけるジョージア（グルジア）人たちの活躍を紹介する一方で、19世紀に「民族」や「国民国家」などの概念がヨーロッパから導入されると、次第に「国が閉じていく」中で、ジョージア（グルジア）人やアルメニア人がマイノリティ化していく過程を詳しく述べている。またオスマン帝国が、最後まで国民国家に即した帝国の改革を目指したものの、結局解体に追い込まれていった経緯を説明している。

前田氏は講義の締めくくりとして、18～19世紀のユーラシア中央部が、ユーラシア西部

(ヨーロッパ)との共時的リズムを持っていたにもかかわらず最終的に異なる道に進んだ事実を振り返りながら、「歴史は常に書き替えられる」ので「自分で書き替えてみる」姿勢を持つことが肝要であると生徒に呼び掛けていた。我々は普段の授業の中で歴史的事実を相対化することの大切さをつい忘れがちになるが、改めてその重要性を意識させられた瞬間であった。

## 研究討議

討議ではまず、古谷氏より「18～19世紀のユーラシア世界には、実は『通底する何か』があるのではないか」という大変示唆に富んだ問いかけが行われた。それに対し前田氏は、この時期のユーラシア中央部において連続する伝統や変容する秩序、引き裂かれるアイデンティティーなど、今回紹介した内容を通じてユーラシア世界全体に共通する歴史的現象（社会の成熟・啓蒙思想の誕生など）がユーラシア中央部にも見られたことを改めて強調した。

その後多くの話題が挙げられた本討議の内容についてここで全ては紹介できないが、討議の最後で前田氏は、教科書ではなかなか言及されないこの時期のユーラシア中央部について、皆さんの知識を補填出来ていたら幸いと発言があった。普段勉強の及ばない時期・地域について専門家の講義を受講できたことは、私も含め、生徒・高校教員にとって非常に貴重な機会になったのではないかと思われる。

### 3日目 8月8日(木) 「18～19世紀のユーラシア西部」

報告：徳原拓哉（横浜国際高校）

#### はじめに

3日目は、大阪大学の古谷大輔教授を迎え、ユーラシア西部とアメリカを主として扱いながら、ユーラシアの西において、ヨーロッパとアメリカがどのように互いを参照しながら「民主」革命を成したのかについて連携授業を行った。

#### 1：「民主」と「共和」の「帝国」

高校側の授業においては、アメリカ革命以後のアメリカが、ヨーロッパの近世的な「帝国」論理を参照しながら、国家を整備しようと模索する過程を、知識構成型ジグソー法を用いて探究した。

その際に中心史料として用いたのは、アレグザンダー・ハミルトンによる『ザ・フェデラリスト』と、中澤達哉『王のいる共和政 ジャコバン再考』（岩波書店、2022年）、そしてアレクシス・ド・トクヴィル（著）、松本礼治（訳）『アメリカのデモクラシー』である。

この狙いは、アメリカとヨーロッパが「共和」概念を中心として、互いに共振しながら18世紀～19世紀の国家形成を行っていたことについて、史料をもとに考察することにあつた。「民主」政を軸として国家形成をするという“実験”は、古くはローマにおける共和政治を参照しながら正当化された。しかし、その国家構造は、実際としてはヨーロッパにおける近世の「帝国」を参照することで形成された。「民主」と「共和」そして「帝国」という3つの概念が、互いに異なる概念でありつつも共存していたという時代の枠組みを考える課題だった。

生徒たちは、これら3つの概念が互いに共存し得ることについて、よく気が付いていた。

特に、中澤の資料にもとづいたアメリカの政治構造と共和制ローマの政治構造の類似点についてよく気が付いて対話を進めていた。一方で、ハミルトンの資料については、読み解いて議論に組み込むことに苦勞をしていた。このことについて、のちの協議においては、近代における「所有」概念にたいする理解を踏まえる必要があることから、授業の本論との結びつきを見出すことが難しかったのではないかと、という提起があった。

## 2 : 「交差」するユーラシア

古谷大輔教授（以降敬称略）の授業は、「交差」という方法概念を梃子として、アメリカとユーラシア西方、さらには1日目と2日目の内容とを結びつける試みだった。その面において、古谷の講義は歴史のみならず、「総合的な探究の時間」をみすえた思考の在り方に着目したアプローチをとっていた。

古谷の授業は、3つの「交差」を用いて生徒の思考を揺さぶろうとしていた。

一つ目は、アメリカとヨーロッパのデモクラシーにおける「交差」である。ここでは、前時の授業における「民主」概念を拡張させながら、歴史上それが「民衆による支配」という政治の形式を示す概念として成立していたこと、アメリカ革命やフランスのジャコバン支配の中で、それが現在における「民主主義」のもつ理念的な性格を獲得していったことが示された。

二つ目は、現在と過去との「交差」である。歴史における「デモクラシー」概念の変化を示しながら、古谷は生徒の考える現在の「デモクラシー」概念を交差させた。この後の質疑応答において、生徒からは「デモクラシー」や「共和」概念を相対化しながら、現在の日本の政治を問い直したり、または「共和国」を謳いながら権威主義的な体制をとる国家の矛盾を指摘する提起が相次いだ。このことは、「交差」という思考方法が探究的な活動において、生徒自身の素朴概念を問い直す方法であることを示唆していよう。

三つ目は、1日目・2日目で学んだこととの「交差」である。古谷は講義の中でこれをユーラシアの構造転換と表現していた。19世紀におけるユーラシア全体での「民主主義」への適応が、それぞれの国家の置かれた状況のなかで主体的に選択されていった結果として生じたものとして示された。こうした世界大の構造変化の中で、各国の変化をどう位置付け、理解してゆくかということが全体性と個別性を往還する歴史理解のために重要であることが示された。

## おわりに

3日目は、全体を通じて生徒の発話が活発であるとともに、現在の「デモクラシー」という概念を問い直すことを通じて、現代社会の諸課題を生徒が探究する姿も見られた。歴史総合や探究科目が、大項目上においても、現代との結びつきを最終的に求めるという性格上、こうした試みとその批判を通じた授業改善は、今後も必要になると考えられる。

## 《参考文献》

アレグザンダー・ハミルトン（著） 斎藤真（訳）『ザ・フェデラリスト』岩波書店 1999年

中澤達哉『王のいる共和政 ジャコバン再考』岩波書店 2022年

アレクシス・ド・トクヴィル（著） 松本礼治（訳）『アメリカのデモクラシー』岩波書店 2005年